
Joker -ジョーカー-

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J o k e r - ジョーカー -

【Nコード】

N 9 1 6 5 Z

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

周りから少し浮いた存在。それがあたし。13になるこの年、あたしはみんなとは違う人生を歩むことになる。”J型”の血を受け継いだ。ただそれだけの理由で。今日からあたしは反逆者。

episode 0 (前書き)

物語が始まる1年前。あたしたちはまだ無邪気だった。

episode 0

ことの始まりは冬も近いある秋の日。学校に忘れ物をしたあたしは橙色の光が差し込む校舎内を急ぎ足で歩いていた。目指すは自分のクラス、6年1組だ。

あたしはこの王立星瞳学院初等教育学部に通っている。ここの6年生であるあたしは、国内では星6生と呼ばれていた。何故こんな呼ばれ方をしているのかというと、この星瞳学院は王族を始めその親族、身分の高い将軍、大商人たちの娘や息子が通う学校であり、その他の学校の生徒と区別するためである。

あたしは教室の前で立ち止まると、軽く乱れた息を整え、歩いている間に乱れた髪を軽く撫でつけてから扉を開けて中へ入る。さすがにもう教室に残っている生徒はいなく、教室はがらんとしていた。

窓際の一番後ろの席があたしの席だ。確か、机の中に入れておいたはずだ。

あたしは何のためらいもなく机の中に手を突っ込んだ。

ペチヨ

「？」

あたしは恐る恐る机から手を引き抜く。

「嫌—————！」

あたしの目の前にはグミのようなゼリーののような物体が張り付い

た、読みかけの医学書があった。

「何だこれ」

あたしが正体不明の物体が張り付いた医学書を見つけた翌日、6年1組の教室にはあたしと眼鏡をかけた男の子、栗色のふわふわとした髪を持つ女の子が集まっていた。

「何って、見ればわかるでしょ。あたしの医学書よ！ これ持つてくるの苦労したんだからね！」

あたしは眼鏡男子をキッと睨みつけながら言った。彼の名前は克蘭。ここ、パルティア王国の將軍の長男であり、あたしの幼馴染。

「これって、昨日ミリちゃんが大切にしていた本ですよ。どうしてこんなことに？」

「それがね、昨日あたしがこの本を忘れたことに気がついてすぐ戻ったんだけど、その時にはもうこうなってたの」

「いったい誰がこんなことを……」

そう言っただけで考え込んでしまったのは現女王の娘、つまり王女であるジュリアである。通称ジュリ。あたしと同じ年だが背が低く、栗色のふわふわとした髪を持つ可愛い女の子だ。王女である彼女には普通そう簡単には話しかけることができない。しかし、あたしの父親は王室専属の医者のため、小さいころから王室に出入りしていた関係であたしとジュリは幼馴染だった。

「みんな何してんのー？」
「お、フリーか」

教室に入ってきたのは克蘭の双子の弟、フリーだ。二人はともよく似ていて、克蘭が眼鏡をはずすかフリーが眼鏡をかければどっちがどっちか分からなくなるだろう。

「お前、もうすぐ授業始まるだろうが。さっさと教室戻れ」

「えー、まだ来たばかりだしいいじゃん。それにこっちのが面白そうだし」

そう言うと、フリーはあたしの後ろにひょいと隠れた。

「あれ？　なんかミリから甘い匂いする」

「甘い匂い？」

フリーに言われて自分の制服の匂いを嗅いでみる。確かになんとなく桃のような甘い香りがする。でもあたし、今日桃とか食べてない……。

「フリー君、それ食べちゃダメ！！」

あたしが一人考えていると、ジュリの慌てる声が聞こえた。慌てて意識を戻すと、ちょうどフリーが本についていたものを口に放り込むところだった。

「あ、ちよつとあんた何してんのよ！　早く吐き出さない！」

「んー？　大丈夫だよ？　だってこれ、お菓子だもん」

「……お菓子？」

あたしたち3人が声をそろえて声を上げると、こともなさにフリーがそう、とうなずいた。

「この前、新作のお菓子出たじゃん」

そうやってフリーがあげたのはかなり名の通るお菓子制作会社だった。確かその娘もこの学院に通っていたはずだ。

「でも、何でそのお菓子がミリちゃんの本に？」

「うーんとね、それは……」

フリーが少し困ったような顔をして教室の入り口ほうを振り返った。そのとたん、あからさまに身体を震わせる少女が一人。確かあの子は……

「う、ごめんなさい！」

その子が教室に入ってくるなり、いきなりあたしに頭を下げた。そうだ。例のお菓子会社の娘だ。

「私、初めてこのお菓子でアイディアを出したんです。だから尊敬するミリアム様にこのお菓子を食べてほしくて……。それで机の中に入れておこうと思ったんですけど……」

「あたしの本が中に入っていた、と」

あたしの言葉にまた身体を震わせる女の子。そんなに怯えなくてもいいのに。あたしはあたしのことをよく知る3人に向かって肩をすくませてみせる。

「理由はよく分かった」

あたしは女の子にゆっくりと近づく。そして肩に手を乗せた。そのとたん女の子は身体をびくりと震わせた。そんな少女の様子にあたしは苦笑した。

「大丈夫よ。怒ってないから。逆にいじめとかじゃなくてホツとしてくるくらいだわ」

「いじめなんてとんでもない！」

「そうでしょ。だからもういいの」

最後にあたしはにっこりと笑って見せる。すると女の子はやっと安心したように微笑んだ。

「ありがとうございます。……その、本は……」

「ああ、父様の本の写本だから気にしないで。さ、授業始まるから自分のクラスに戻って」

あたしがそう背中を押すと、女の子は最後にもう一度頭を下げた教室を出て行った。

「……ミリ、そういうことから女の子から熱烈に好かれるんだぞ」

「今ので確実に熱狂的ファンが増えたな」

「ミリちゃんは人気者ですね」

幼馴染3人はそれぞれ他人事のようにそう言っている。私がそれに不満を言うと、一斉に同じ返事が返ってきた。

「……だって他人事だもん」「」

なんだかなー。

episode 0 (後書き)

新作投下!!

連載3つ掛け持ちになるので更新が遅くなる可能性があります。あらかじめご了承ください。

prologue (前書き)

本編はここからスタートになります。これからこの物語をよろしく
お願いします。

prologue

あたしは一人鏡の前に立っていた。時刻は日付が変わる、そして私が13年前に生まれた時間の数分前。

鏡に映る自分の顔を眺めながら、この13年間のことを思い出していた。

10年前、医者である父があたしを連れてこの国に来たこと。

9年前、父がその腕を認められて王家専属の医者になったこと。

8年前、初めてジュリヤクランとフリーリに出会って話をしたこと。

7年前、あたしが1組に入ったこと。

私が通っていた王立星瞳学院初等教育学部は、この国の王女を始め身分の高い子供しか入学することができない。あたしは父が王家専属の医者になったから、この学校に通うことが出来ていた。

そしてこの学校のもう一つのルール。それは、身分が高い順に1組からクラスを割り振られること。

王女であるジュリはもちろん、1組だ。そして將軍家の長男であるクランも1組。しかし、同じ將軍家でも次男であるフリーリは2組だ。大商人の子供たちなどは3組。

だからいくら王家専属の医者 of 娘だからといって、他の国から来たあたしが1組に入れるはずもなかったのだ。それなのになぜ私は1組に入れられたのか。

理由はただ一つ。私がジュリの幼馴染でジュリに気にいられてた

から。

当然、あたしは周りの子供からその親にまで、好奇の視線、あるいは嫉妬を向けられた。最初のうちはあたしも毎日毎日悩んでいた。ホントに自分はここにいるのいかと。そしてその悩みは多少小さくなったとはいえ、今もあたしの中に居座っていた。

そして今年。春にジユリが誕生日を迎えた。13になったジユリの右の瞳には星の印が浮かんでいた。その星の印は、女王の血筋を表すものであり、同じ王女でもこの星の印が無ければ女王になることは出来ない。星の印を右の瞳に刻むのは、ある特殊な血液型。それをこの国では”J型”と呼ぶ。

このJ型とはとても不思議なもので、王女が何人いても、その中のたった一人にしか現れたことがない。そしてこのJ型の証ともいえる星の印は、王女が13になった時に右の瞳に現れる。よってこの国では13歳からが正式に大人として認められ、労働の義務を負う。

よって今年13になるあたしは医者になるべく、星瞳学院の中等教育学部に通いながら、研修医として父のもとについて勉強していた。

そして昨夜、夜遅くに帰ってきたあたしは父の部屋から明りが洩れているのに気付き、消してから寝ようと父の部屋に入った。そこに父の姿はなく、あたしはその日父が診療所に泊りこむと言っていたことを思い出していた。

「あれ、これ、父様の日記？」

机の上にはあたしがいくらせがんでも見せてくれることはなかつ

た、父の日記が置かれていた。普段は鍵の付いた引き出しに厳重に保管されているそれを開いたのは、ただ純粋な好奇心だった。

『ミリアムは、J型だ』

自分の目を疑ったのは言うまでもない。あたしがJ型？ だって、あれは女王の血筋にのみ現れるものでしょう。それなのに、何故あたしが？

あたしは混乱しながらも日記を元の位置に戻し、明りを消してから自分の部屋に入り、ベッドに身を投げ出してから、つうと涙が頬をつたうのを感じた。もしあたしが本当にJ型なら、もう2度と幼馴染たちと元のように話すことはできないだろう。

「やっぱり」

時計の針が日付が変わる時刻を示した瞬間、ゆっくりとあたしの左目には星の印が浮かび始めていた。ジュリとは少し違う、真黒な星。

あたしは傍らにあらかじめ用意しておいた眼帯で左目を覆う。この瞳で光を見ることはもう2度と無いだろう。

「あたしがJ型だと誰にも知られちゃいけない」

そうしないと、みんなに迷惑がかかるから。

たぶんあたしがJ型だと知られれば、あたしは国の反逆者として扱われる。だって、J型は女王になる者にしか現れてはならないから。

「誰にも迷惑がかからないところへ」

あたしはここにいちゃいけない。どうすればいいのかは分からないけど、ここから出て行こう。誰にも言わず、誰にも迷惑をかけずに。一人で、ひっそりと。

あたしは自分の黒くて長い髪を左右に2つに縛った。これは自分の中ではじめをつけるため。未練を断ち切るため。決意を固めるため。

あたしは全てを捨てていこう。何もかも。あたしに残ったのはこの忌々しい血だけ。

「さようなら、父様、ジユリ、クラン、フリー。ありがとう」

誰もいないその場所に、あたしは静かに言葉を残して鏡の前を離れた。

暗い屋敷の中を足音を殺して歩く。屋敷の扉に手をかける。最後にもう一度だけ、屋敷の中を振り返る。父様の部屋のほうを見て、思わず涙が出そうになった。慌てて上を向き、涙をこらえる。

全てのものが眠る深夜の闇の中、あたしはそつと屋敷の扉を開けた。

episode 1 (前書き)

シリアス全開

でもこの物語はまだ始まったばかりです。これからこの子たちを
よろしくお願いします。

扉を開けると、あたしの目の前に月のやわらかい光がひろがった。冷たくも優しいその光に思わず涙が出そうになる。

あたしは慌てて目をこすり涙を止めると、懐に入っているものを確認した。今年、中等部に上がってから護身用に使い方を学び、今では愛用している魔銃。

あたしはもともと魔力保有量が多いらしく、魔力を込めることで撃つことが出来る魔銃とはとても相性が良かった。今ではほぼ無限に撃つことができる。

あたしは最後にもう一度だけ振り返って門のほうへと歩を進める。そこでふと気がついた。門の外に誰か立っている。あたしは警戒しながらその人物に近付いた。

「……フリー？ 一体どうしてここに？」

「やっぱりな。お前、昨日一日ずっと変だった。なんか今にもここを飛び出していきそうな気配がしたからここですっと張ってた。以上」

「以上つて、あんた……。何で来たのよ。やっと決心したっていうのに」

「オレ等、幼馴染だろ。お前がオレ等を大事に思っているように、オレだってお前のこと大事に思ってたよ。だから、一人でどっか行こうとすんな。少しはオレ等を頼れよ」

フリーにしっかりと見つめられながら言われて、思わず心が揺らいだ。そんな自分に心の中で舌打ちしながらあたしはフリーを見つ

め返した。

「あたしは国を捨てる。もちろんフリー達も」

「何故？」

「……そんな関係ないでしょ」

「嘘。絶対ある」

……意外とフリーって頑固なんだよな。たぶんこれは白状しないところ通してもらえなさそう。早くしないと日も昇っちゃうし。

あたしは一つため息をついて、左目の眼帯を外した。あたしの左目を見て、フリーが息をのんだ。あたしは少し自嘲気味に笑いながら言葉をつないだ。

「これで分かったでしょ。あたしがここにいたら面倒なことになるからここを出ていく。だから早くそこをどいて」

「……オレも行く」

「分かったから早く……って、え？」

驚きのあまり、思わずフリーの顔をまじまじと見る。フリーはバツが悪そうに視線を逸らして繰り返した。

「だから、オレも一緒に行く」

「何故？」

「お前が心配だから。文句あんのか？」

「……勝手にすれば」

あたしは仕方なく首を縦に振った。こうなったらいくら言ってもこの頑固なフリーはひかないだろう。それに、なんだかんだいってあたしも一人で生きていくのが不安だったのだ。そんな自分の弱さ

が嫌になる。

「お前は悪くないよ」

「勝手に人の心読むな」

「まったく、昔からこいつ相手だと調子狂う。あたしは先行き不安になりながらも、とりあえず国を出るべく、門のほうへと歩き出す。

「なあ、ミリ。国を出てどうするんだ」

「さあ」

「それなら」

フリーがあたしの腕を掴んで、あたしを無理やり向かい合わせさせた。あたしはあたしよりも少し高い位置にあるフリーの目を見上げた。

「その目の正体を探そうぜ」

「この目の正体？」

「そう。その星、ジュリのものとは違うだろう。だから、ジュリのは別の意味があると思うんだ。だからそれを探して……」

「国に戻る、と？ それは甘いんじゃない。もしこの目が別の意味を持つていたとしても、それをこの国の人が簡単に信じると思う？」

「そんなの、やってみなくちゃ分かんないだろ」

あたしはフリーの手を振りほどいて指を突き付けた。

「甘い。それまでの伝統が覆されるのよ。そう簡単に人が信じようとするわけないじゃない」

あたしはそれでも何か言いたげな顔をしているフリーを置いて、

さっさと歩きだす。慌ててフリーが歩き出す気配がした。

「あたしだって何も考えずに国を出ようとしているわけじゃないの。それが1番だと思っわけがあるからこうして今ここにいるの」

「ミリの言いたいことは分かった。でもオレだって諦めないから」

ホントしつこい奴。でも、今のあたしにとって、フリーがそう言うてくれたことが少し嬉しかった。

「でも、もう少し考えたほうがいいと思うぞ」

「……誰？」

国を出る門の手前に、誰かが立っているのが見えた。

「……兄さん？ 一体どうしてここに？」

あたしとフリーは若干警戒しながら門の前に立つクランに近付いていった。

「お前ら、挙動不審すぎんだよ。ばれだつたつ。それで、こんな時間にどこに行くんだ？」

「国外に」

「国外？ 何でまた」

「クランには関係ない」

「そうか。ならここを通すわけにはいかないな」

「な！？」

クランが不敵に笑う。……その顔、どっかの悪役みただぞ。

「その左目。どうしたんだよ」

「え？ …… あっ！」

あたしはクランに言われて左目のあたりに手をやった。そこにはつけていたはずの眼帯がなかった。慌てて視線を戻すと、その眼帯はクランの手の中にあっただ。いつの間に……。

「 …… 今ならまだ黙ってておいてやる」

「嫌だと言ったら？」

「2人とも追われることになるんだぞ」

「それでも構わない」

クランは何かを見極めるように、考えるように、あたしとフリーリのことをじっと見つめた。そして、ふっと顔をゆがめると、門の陰から何かを取り出してフリーリに投げた。

「お前の愛用の弓と長剣。国を出るなら要るだろ。ただし、ここから出たら俺はこのことをジュリに伝える。俺だってそれが役目だからな」

「ありがとう、クラン」

「別に礼を言われることじゃない。ほら、もう日が昇る。さっさと行け」

「兄さん……。お元気で」

あたしとフリーリはクランのわきを抜けて門の外へと出る。すれ違ふ時、クランがあたしの手の中に眼帯を戻した。そして、あたしたちが出た瞬間、門が閉まった。これであたしたちはもう後戻りできない。

「行こう、ミリ」

あたしたちは沈みかけた月夜の道を歩き始めた。

「俺も相当甘いな」

思わず苦笑が漏れる。俺はついさつき幼馴染と弟が出て行った門を見上げた。今はもう固く閉ざされている。

「さてと。俺はあともう一仕事しなくちゃな」

これから俺がやらなきゃいけないことを思うと目眩がするが、これも仕事なのだから仕方がない。特にジユリをなだめなきゃいけないのであるうことに気が滅入る。

「ったく、あいつらは面倒事だけ残していきやがって」

そう毒づきながら、城へと向かう道を一人で歩く。

翌日

国中に衝撃が走った。医者の娘と將軍の息子が反逆罪で指名手配。追跡チームの代表はジユリ、指揮はクラン。幼馴染同士が敵対した瞬間だった。

episode 1 (後書き)

次回からコメディ要素を……入れるの難しくね!?
うーん、でもボケの血がうずく……。

どうかして入れていきます)・v・。(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9165z/>

Joker -ジョーカー-

2012年1月14日01時02分発行